

〈保育者の願い〉

- *多様な直接体験をする中で、自ら「どうしてかな」「やってみよう」という意欲を育てたい。
- *近隣の教育施設など、恵まれた人的環境を保育の中に取り入れ、人との関わりを広げていきたい。

◆なかよし田んぼを見に行こう

グリーンパークや地域の方のご協力で、今年も田植え体験ができることになる。事前にみんなで田んぼを見に行く。田植えが済んでいる周辺の田んぼの様子にも目を向け、「まっすぐだ」「水がいっぱい!」「田んぼがキラキラしてる」と、子どもたちは感じたことを口々に言い合う。

◆なかよし田んぼの田植え体験

初めは無言で立ち尽くしたり周辺を歩き回ったりする姿が見られたが、田んぼに入ると「ヌルヌルだ」「あったかい」「ヒルがいたらどうしよう」「あつ蛙だ!」など泥の感触を味わったり生き物に関心を示したりする。「馬場の跡+（十文字）の所に植えようね」と、お家の人や地域の方から声をかけてもらい丁寧に植える。



◆幼稚園にも田んぼを作りたい ～残っていた苗をいただいて帰る

田んぼの土はどんな色をしていたか、どんな感触だったかを思い出しながら、粘土山、畑、砂場の土と水とを混ぜ、感触を確かめながら土作りをする。バケツやタイヤ、園庭に掘ったビオトープ池などに苗を植える。



◆田んぼはどうなっているかな？

風の強い日、「バケツの稲がすごいよ」「田んぼの稲はどうなってるかな?」と心配になり、なかよし田んぼに見に行く。なかよし田んぼに着くと、「苗が踊ってる」「音がする」と風に揺れる稲をじっと見ている。風に飲み込まれそうな迫力を感じながら田んぼの中道を一人ひとりが自由に歩いたり、走ったりして心を開放したことで、一層、自然の壮大さを感じることができた。

その後も稲の生長や変化に気付けるよう、田んぼへ繰り返し出かける。

◆田んぼの稲、枯れてないかな？

夏休みの間に稲がどうなっているかを心配し、みんなで田んぼに出かける。「稲が黄色くなってる」「ここの田んぼは緑だよ」「水がない」「これ、米だよ」「スズメが何か食べてる」「米を食べてるのかな」「イナゴが飛んだ」「ショウリョウバッタだよ」「だって・・・」「へびもいるかな?」とじっくりと様子を見たり、イメージを膨らませたりしながら会話を楽しむ。



◆稲刈り「よづくはで」を一緒に作ろう

保護者や地域の方に手伝ってもらいながら、鎌で稲刈りをする。田んぼの中の最後の稲が刈られると、一斉に「やったー!」「ばんざーい」と喜び合う。

「いっぱい持てるよ」「かゆーい」「よいしょ、よいしょ、重たーい」と刈り取った稲を運ぶ。力を合わせる大切さや働く大変さを実感したようである。

「よづくはで」の土台作りが始まると「高ーいなあ!」と見上げる。稲を地域の方やボランティアさんから受取ったり、手渡ししたりする。大きな稲はでを見上げ、「フクロウに見える」「トトロみたいだ」と口々に言う。



【反省と考察】

- 米作り体験を通して園外保育の途中で挨拶したり、声をかけてもらったりする地域の方や保護者の方たちとの関わりをもつことは、幼児期の子どもたちにとって貴重な体験となった。
- 園内へ苗を持ち帰ったことで、バケツやタイヤのミニ田んぼができた。このミニ田んぼを見ることで、「田んぼはどうなっているかな?」と意識や思いをつなげることとなった。
- 田植え体験を通して言葉が豊かになり、「蛇が田んぼに来るのは蛙を食べるため」「サギが田んぼに沢山いるのはオタマジャクシを食べてるんだ」など、わかったことや気付いたことを話すようになった。グリーンパーク職員さんの知恵袋や自然体験から、自然界の営みや摂理、自然環境に触れる貴重な経験の場となった。

みどころ

地域の自然環境や身近な人と触れ合うことで、園内の生活だけではできない数々の貴重な体験をしています。保育者が子どもたちに「多様な直接体験をさせたい」「人との関わりを広げたい」という願いをもち、そのために地域環境を活かすという計画を保育に位置づけています。そうした長期的な計画と併せて、その時々の子どもの気付きや心の動きに応じて、園内にもミニ田んぼを作ったり、田んぼの稲の様子を見に行ったりしています。どんな体験をさせたいという願いをもって見通しを立てることで、子どもの豊かな体験を支えています。